

二十世紀とは、歴史家にとって、至福だったのか、それとも受難だったのか、おそらく、そのいずれでもあろう。

至福である理由は、いうまでもなく、目まぐるしい事件や変動に恵まれたことだ。題材に不足することなどありえなかった。つきからつきへと勃発する戦争や革命、速度のはやい変化と交代。それに、ラジオからインターネットまで、情報を送りどけてくれるメディアの充実。どれも、歴史家にとっては、心づよい味方である。史料、材料はふんだんにあり、それゆえに異説をとなえるのも自在である。史料不足になやんで久しい歴史家にとっては、二十世紀こそ、無二の幸運の時代である。かりに自分と同時代の歴史をあつかわず、はるかな過去をターゲットとするにしても、二十世紀は完備した図書館や史料館を提供した。町から村へと、書物や文書をもとめて遍歴する必要もなくなった。

だが、そのことは歴史家にとって、受難でもありうる。あふれるような材料は、その使用方法についての困惑をうながす。多すぎるのだ。たくみに、矛盾なく史料をつなぎあわせることができるか。ついに、文書の森林に迷いこんだような錯覚におそわれかねない。

そればかりか、歴史家の多くは、変動する世界の波にもあそばされ、歴史を的確に描写しうる以前に、みずから喪失し、自壊においこまれがちだ。現実世界によって傷つけられ、歴史に距離をおいてゆったりと眺望するなどといった、優美な著作や研究などは夢と化してしまった。時代によってみくちやにされたのである。

至福と受難とは、どうも背腹一体だったようにみえる。そもそも、歴史家は歴史のなかに生きていくからには、二十世紀の大変動から孤立していらるはずはない。見方によって、これが至福であったり、受難であったり。もっともそれは、なにもこの世紀ばかりの事態ではあるまいと反論されそう

だけれども、二十世紀の歴史家は、在来のそれとくらべて、はるかに重大な任務を負っているようにみえる。つまり、十九世紀末このかた、歴史家は近代世界の学問に、不可欠の一席をしめ、冷徹な理解と考察を、そして厳密な論述と記録とを要求されるにいたった。かつて、文学とほんの一線の境目を共有するばかりだったとき、歴史家にはその重荷は免じられていたのに。歴史は、二十世紀には学問になりお世話なのである。大学にも、アカデミーにも、市民権をあたえられ、歴史家は歴史学者ともなった。

そのときから、かえって歴史家は現実世界との距離を敏感に意識するようになり、時代との交錯に悩みはじめる。いや、たたくは、その苦悩を自覚しうる秀れた歴史家を輩出することになったのだ。至福と受難とは、そうした歴史家のうえに降りおりた。

さて、二十世紀も終わろうとするいま、その至福と受難の足跡をたどりなおしてみたいと考えた。歴史家がいきた二十世紀の歴史を、回顧する。もちろん、それは偉大な歴史家を顕彰するばかりが目的ではない。二十世紀からつぎの世紀へと歩みつつあるわたしたちが、あらためて歴史にたいしてどう対面するかという課題を、みずから引きうけ、考察するためにである。

歴史家は、二十世紀にいかんにかに生き、いかに思考し、いかに書いたか。それは、せまき歴史家はかりではなく、およそ歴史に興味をいだく現代人にとって、ひとしくかわりのある問題であろう。読者とともに、この問題にとりくんでみたい。

はじめにあたり、本書の構成について、一言しておく。本書は、「日本編」と「世界編」からなる。それぞれが、上下二巻からなり、合計四巻をなす。収録される歴史家は、ほぼ一〇〇人におよぶはずである。いずれもが、二十世紀の歴史学の形成に巨大な貢献をはたした人びとである。採るべくして実現しえなかった項目もあるが、紙幅の関係などから断念した。大方のご諒解をいただきたい。

「二十世紀の歴史家」という限定は、さしあたりつぎの条件にしたがった。二十世紀の歴史学を代表するとの趣旨であるが、もっとも初期のものでも、その活動が十九世紀よりは、つぎの二十世紀に属すること。さらに、「日本編」については、本書の執筆の時点で存命でないこと。そして、狭義の歴史家はもとより、その隣接領域において、歴史学に多大な衝撃をあたえた学者・著者をもふくむ。

歴史家たちの生涯をたどりつつ、なおいまでも精読の価値のある多くの著作についても言及するよう努めた。現在では、残念ながら市販されていない書物もあるが、ぜひとも図書館などにおいて、二十世紀の歴史家たちの筆のあとをたどってみたい。かたが、二十世紀の歴史学へのヒントが、ふんだんに蓄蔵されていることを発見するにちがいない。

さて、いまから「日本編」の第一巻がはじまる。とっかかりは二十世紀の初頭、明治という時代に属するが、そんなに古い過去ではないと了解していただければすだ。